

思い出の舞台

ジョルジュ・ラヴェッリ演出「ペレアスとメリザンド」

遠山 博雄

最初のフランス留学は1977年の夏から1981年の春まで。研究テーマとして選んだのが当時ほとんど一冊も新刊で作品を入手できないベルギー世紀末のマイナー・ポエトだったため、その大半はリシュリュエ街の、今は懐かしい（旧）国立図書館（BN）で過ごした。完全にゼロからの出発で、先ずはDEA取得という課題もあっていつも時間に追われていたし、もとより一給費留学生に潤沢な資金などあるわけもなかったから、芝居だ、音楽会だ、展覧会だ、映画だと、豊かなパリの文化的環境にアンテナを張り巡らして泳ぎ回るなどかなうはずもない、単調な毎日だった。

そんな中、元来が歌好きだったこともあって、ガルニエ宮の（旧）オペラ座だけはほぼ唯一の例外で、BNを抜け出しては何時間も行列をして前売りの安い席を買い求め、疲れたからだを厭わず、何度も足を運んだものである。そこで初めて観たのがペーター・シュタイン演出の「ラインの黄金」、確か着いた年の暮だったと思う。出発前、大学院の渡邊守章先生の授業でワグナーや「ニーベルングの指環」について色々お話を伺っており、マラルメの「ワグナー論」の講読の教室にも顔を出していたので、どこかで目に留まって、直ちに駆け付けたのである。当時のオペラ座の支配人はロルフ・リーベルマン（そのことを知ったのは帰国後のことだったが）、その下でクラウス＝ミヒャエル・グリューバーが「ワルキューレ」を、ジョルジオ・ストレーレルが「フィガロの結婚」を、パトリス・シェローが「ホフマン物語」をと、綺羅星のごとき才能ある演出家たちが次々と多彩な舞台を展開していた。だから、単なる無邪気なまぐれあたりでも、思えば大きな僥倖だったわけだ。中でも複数回通った数少ない演目が、ジョルジュ・ラヴェッリ演出の「ペレアスとメリザンド」だった。

最初にこのドビュッシーの名高いオペラを観たのは翌1978年の4月、昼間BNでメーテルランク原作を読んで「予習」をし、その夜に観に行った。もう40年近くも昔のことであるし、手許にビデオがあって見直せるわけでもないから、「思い出の舞台」といっても、上演プログラムとリーベルマンに捧げられた2冊の写真集¹⁾をめくりながらの断片的な回想で、現在時に引き付けて改変されたものになってしまうかもしれないが、開幕から終演まで一気に時間が経過したことだけはよく覚えている。

舞台は仄暗い銀色の照明に染められた、黒と白を基調とする幽玄の世界、影絵のような中世の古城を背景に、黒子でもある侍女（に扮した黒衣の男？）たちが浮遊するように見え隠れする幻想的な雰囲気の中、登場人物たちが、セルジュ・ボード指揮のオーケストラの演奏の下、過度に「劇的」にならずに、淡々と静かに歌い、演じていた情景を思い出す。ロジェ・ソワイエのアルケル、ジョスリース・タイヨンのジュヌヴィエヴ、リチャード・スティルウエルのペレアス、そしてフレデリカ・フォン・シュターデのメリザンド…。

この戯曲——といっても音楽なしの芝居として上演されることはまれだし、パリで一度観たきりであるが——というかこのオペラは、齢の離れた若い妻と同じく若い異父弟の道ならぬ恋と、それに悩み、嫉妬に苦しむ夫＝兄の心理と情念の、それ自体はありふれた運命的な悲劇を核に、メリザンドという、どこか現実離れた正体定かならぬヒロインをめぐる謎めいた物語を縋り合わせたもの、といえるだろう。解釈が大きく分かれるのは、このヒロインの存在をどこまで重視するか、またどのように造型するか、という点ではないか。

メリザンドとは何者なのか。ラヴェッリの舞台

は、終幕で黒眼鏡のアルケルがほのめかすように、死の気配漂う中世の古城に引き込まれ、閉じ込められて、生きることの居心地の悪さに耐えている異界からの迷い人、という読みに支えられていたと思う。プログラムの中でメリザンドはどこか東方の姫ではないかと自身語っている演出家は、幻視者たる長老の叡智を共有していたのであろう。私はこの読みに共感を覚える。舞台に置かれた大きな円い銀盤の泉——若い二人がはじめて心を通わせ、また破局の直前に激しい愛の告白をする盲人の泉——、メリザンドの流れ落ちるような髪、海に浮かぶ小舟のようなその死の床、あの夢幻的なセノグラフィーから私が濃厚な水の存在を感じ取ったのは、ごく自然なことだったと思う。メリザンドは水という異界からの越境者だったのではないか。そう考えれば、時として不可解なその言動も何とか説明がつく。もちろんゴローのマッチョな暴力も血の殺戮も演じられたはずだが、全く記憶にない。嫌いなものは忘れるというご都合主義の功德である。

留学の2年目、無事 DEA を終え、自由な読書時間を得て、やはり BN で世紀末期のメーテルランクの戯曲群を読んでいた時に、水とその娘のようなヒロインたちというテーマに逢着したのは、あの舞台がヒントになっていたのか、それともはじめて原作を読んだ時にすでに漠然と感じ取っていたのか、もう定かではない。が、メーテルランクの物質的感受性を消化したようなラヴェッリの舞台は、今にして忘れがたい印象を残している。

*

それはそれとして、ずっと後になって観た生の舞台は2本、1993年のピーター・ブルック演出の「ペレアスの印象」(ブッフ・デュ・ノール劇場)と1994年のペーター・シュタイン演出のもの(シャトレ・パリ音楽劇場)である。後者は原作の世界をある程度残した上で、緻密に組み立て、じわじわと追い詰めていく心理劇、ブルックの短縮版はさらに神秘性をはぎ取った過激な人間劇だった。しかしながら、両大家の舞台であっても、親近感を覚えることはなかった。

昨今、あるいはこちらの解釈の方が主流で、異界と斯界の接点を作るようなラヴェッリ版の方が異端なのかもしれない。メリザンド=カマトト悪

女説というのものもあるくらいだ。しかし、だからといって、メリザンド=英国貴族社会に潜り込んだ娼婦²⁾ だの、全てはメリザンドの性的妄想とオブセッションのなせる一夜の夢³⁾ などという「解釈」は、まさに荒唐無稽としか言いようがない。メーテルランクがもしもそんな上演に立ち会っていたら、それこそ卒倒するか憤死してしまうのではないか。この作品が、どう考えてみても戯曲よりはドビュッシーの音楽に力によってフランス・オペラの定番として毎年のようにどこかで舞台にかけられている現状を思えば、演出家としても何とか新機軸を打ち出そうと腐心しているのかもしれないが、もうとてついでに行かれないという心境である。この種の舞台を(ビデオやTV放映で、ではあっても)観たことを早く忘れてしまいたいと思うのは、やはり齢のせいなのだろうか。してみれば、初めて目の当たりにした舞台がラヴェッリのそれで、かつ自分自身がベルギー象徴主義の研究に取りかかっていた時期と重なっていたことは、リーベルマンの時代にパリに居られたことと共に、やはり大きな幸運だったのだろうと思う。

- 1) *Rolf Liebermann en passant par Paris Opéras*, Éditions Gallimard, Paris, 1980; *L'Ère Liebermann à l'Opéra de Paris*, BnF, Gourcuff Gradenigo, Montreuil, 2010
- 2) グレアム・ヴィック演出、グラインドボーン音楽祭、1999年
- 3) カティ・ミッチェル演出、エクサンプロヴァンス音楽祭、2016年